



日本・ポーランド国交樹立100周年（1919～2019年）記念事業



©Marco Borggreve

▼実際、私たちはいわゆる一般的なコンサート活動のほかにも、例えば劇場のディレクターやバレエの振付家をはじめ、トリー・エイモスのようなオルタナティブ・ロック界のスターらと、ジャンルを超えて日常的に活動をしています。

■デビューから10年。これまでの活動の中で、“幸せ”や“やりがいがある(キツイ!)”と感じた瞬間は？

多くの偉大な作品から成るクアルテットのレパートリーに取り組んでいることに“幸福”を感じます。時代を超越した芸術作品に携われるのは、音楽家に許された最高の特権です。作曲家と聴衆の間を結ぶ橋渡し役として、私たちは数々の傑作を聴衆の皆さまにお届けすることに充実を感じます。

私たちのキャリアの中で最もチャレンジングだったひとつは、きっと2008年のミュンヘンARD国際音楽コンクールへの参加ですね。当時、私たちは結成から2年にも満たない生まれたてのグループでした。ミュンヘン・コンクールで常に求められるような幅広いレパートリーを得ることはとても大変でしたが、自分たちが1位と他のほとんどすべての特別賞をもらった時は、喜びもひとしおでした。あの時は自分たちのキャリアの中で、最も幸せで充実を感じた瞬間のひとつでしたね。

■今回の日本ツアーのプログラムについてお聞かせください。

今回の日本ツアーでは、シューベルトによる初期の弦楽四重奏曲を中心に演奏します。聴衆の皆さんはこれらの作品について、おそらく後期のものほどにはご存知ないでしょう。ですが、きわめて若い時分に書いたこれらウィーンのフレッシュな音楽には度々驚かされます——その断片の多くが後期のきわめてシリアスで哲学的な弦楽四重奏曲へとつながりを示しているからです。

そのほかに、私たちの母国ポーランドからのお土産として、現代作曲家クシシュトフ・ペンデレツキのポスト・ロマンティックな傑作である弦楽四重奏曲第3番も演奏いたします。

■今後のレパートリーや目標について教えてください。

昨年からはシューベルトの弦楽四重奏曲の全曲チクルスという大きなプロジェクトに取り組んでいます。録音するほか、ヨーロッパとアメリカに定期的にツアーに出て演奏もします。今回このチクルスを素晴らしい聴衆である日本の皆さまの前でもご披露できることをとてもうれしく思います。



©Nikolaj Lund

■クアルテット結成のきっかけ。

私たちはワルシャワのショパン音楽院で学んだ後、皆それぞれ別々に“音楽の都”ウィーンに移り、ウィーン国立音楽大学で引き続き研鑽を積みました。4人ともプロの室内楽グループを始めたはずと心に抱いていたこともあり、偶然というよりは運命のように集まって弦楽四重奏団を結成したんです。

■「Apollon Musagète Quartet」という名前にした理由は？

グループ名は、作曲家やヴァイオリン製作者の名前よりも、音楽に対する私たちの取り組み方を表す言葉を選ぼうと考えていたところ、アルバン・ベルク四重奏団の創立メンバーだったハット・バイエル先生が、ギリシャ神話のアポロがよいんじゃないかとヒントをくださったんです。

アポロは音楽、詩、踊りなどさまざまなジャンルの芸術を司るミューズを率い、束ねています(アポロン・ミュゼザゲート[ミュゼザゲート]はフランス語で“ミューズたちのリーダー”を意味します)。ですので、広大な芸術の一部として、他の芸術ジャンルと手を携えようという私たちの考え方にピッタリでした。♬

クアルテットの饗宴2019

アポロン・ミュゼザゲート弦楽四重奏団 2019.6.7 金 19:00 紀尾井ホール

シューベルト
弦楽四重奏曲第1番ト短調(変ロ長調) D18

ペンデレツキ
弦楽四重奏曲第3番「書かれなかった日記のページ」

シューベルト
弦楽四重奏曲第15番 Op.161, D887

料金(税込) S: 5,500円 A: 3,500円 U25 A: 2,000円

お取扱い 紀尾井ホールウェブチケット
<http://www.kioi-hall.or.jp>

紀尾井ホールチケットセンター
03-3237-0061 (10～18時/日祝休)

後援 駐日ポーランド共和国大使館/ポーランド広報文化センター



主催
公益財団法人 日本製鉄文化財団
東京都千代田区紀尾井町6番5号
tel:03-5276-4500(代表)

